

佐久間象山の儒学思想研究

韓, 淑婷

<http://hdl.handle.net/2324/2534515>

出版情報：九州大学, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 韓 淑婷

論 文 名 : 佐久間象山の儒学思想研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は幕末の思想家佐久間象山の儒学思想を中心に、これまで象山の儒学研究において看過されていた側面に注目し、象山の幕末当時における思想の実相をできる限り解明することを目的とする。

本論文では二つの視点を用いることとする。一つは、象山の儒学＝朱子学というこれまでの捉え方と異なる視点を取ることである。具体的には、江戸時代において主に受容されたとされる理気二元論や心性修養論、学問政治論を内容とする朱子学のみならず、朱熹の『家礼』や『琴律考』などに代表されるような、儒教儀礼や礼楽思想も含めた、より広い意味での朱子学に注目する。本論文ではこの「伝統的」な意味も含め、さらにより広く儀礼的な面をも注目した意味での「朱子学」を取り上げるため、佐久間象山の「儒学」という語句を使用した。もう一つの視点としては、幕末維新という転換期において「朱子学」の考え方は克服されるべきものであるという視点とは一線を画し、また明治維新の結果に立脚して朱子学を評価する視点、つまり朱子学のどの部分が日本の近代国家の成立に役割を果たしたのかを見出すという視点の枠をも越えて、幕末当時において、象山における儒学理解はいかなるものであったのか、象山がいかに儒学を基盤に洋学を捉えてそれを受け入れていたのか、さらに彼はいかに儒学と洋学とを思想的素地として幕末期の政治課題に対応していたのかなどの問題について、総合的に考察することである。

本論文は六章から成り立っており、第一章「佐久間象山の朱子学理解—「居敬」を中心にして」では、象山の思想的基盤である朱子学を取り上げ、従来注目されていなかった「居敬」という要素について、象山の考える「居敬」の内容、性格、特徴を明らかにしている。第二章「佐久間象山の洋学受容と朱子学—「居敬」の機能に注目して」では、「居敬」という要素が象山の洋学学習にいかなる役割を果たしたのかについて、具体的に彼の砲学習得を通して検討し、朱子学の学問方法である「窮理」と「居敬」が象山の「東洋道德、西洋芸術」論にいかなる意味をもつのかを考察している。第三章「佐久間象山における「楽」の思想—琴学の全体像」では、象山の「楽」思想を取り上げ、象山における琴学の習得、琴学に関する著述及び琴学資料の収集を検討し、さらに『琴録』の編纂に着目し彼の琴学思想を概観する。続いて第四章「佐久間象山における琴学—『琴録』の意義」では、象山が実際に編纂した『琴録』を取り上げ、『琴録』の書誌情報を明らかにした上で、『琴録』の内容、編纂方式、琴学における主張を検討し、『琴録』の特色を明らかにする。第五章「佐久間象山における「礼」—『喪礼私説』を中心にして」では、これまで全く取り上げられることがなかったが、象山の政治思想において重要な位置を占めていたと考えられる『喪礼私説』を取り上げ、『喪礼私説』の特色、作成意図及びその政治的意義を考察する。そして、『喪礼私説』の「成服」項目を詳細に検討することを通して、象山における幕藩制的秩序観を明らかにした。第六章「佐久間象山の政治発言における儒学経典の運用」においては、象山が政治問題を思考する際にどのようにして

儒学から知恵を獲得し、政治主張を表明する際にいかに儒学の論理に依拠していたのかについて詳細に検討し、従来見逃されてきた象山の政治思想における儒学經典の運用の一側面を明らかにした。

以上、本論文では、象山の「東洋道徳、西洋芸術」が存立する方法論的基盤を明らかにした上で、彼の学問の特徴は「窮理」という当時の学問的「常識」において、「居敬」を同時に提起することにより、朱子学の学問方法を洋学受容に応用させ、さらに洋学を為す主体には「仁」の素養が要求されるという意味において、方法としての「居敬」を重視していたことを明らかにする。次に、象山が唱えた「東洋道徳」について、「東洋道徳」は礼楽思想を主軸に提起されたこと、またこの礼楽思想は律呂への重視と儒式喪礼への主張を具体的内容としており、象山が礼楽思想を主軸とした「東洋道徳」に基づいて「西洋芸術」を取り入れていたことを指摘する。最後に、政治論において、象山は「国力」を重視しながらも、人心の統合・庶民の教化及び社会秩序の強化などの面を強調し、その「国力」に儒学の「徳」が深くかかわっていたことを確認し、軍事力を優先し「徳」という要素を後退させることなどは決してなかったことを解明した。

本論文は、佐久間象山の儒学思想について、先行研究とは異なる独自の視点を踏まえてその実相をできる限り明らかにしたものである。